

## 海女漁の振興で、漁村の再生を

海の博物館

館長 石原 義 剛

### 海女の減少

いま「海女」は全国18県に2,174人ほどのいる(2010年海の博物館調査)。その海女のいるところはどこも半島や島嶼部である。因みに太平洋側では房総半島、伊豆半島、志摩半島など、日本海側では能登半島、向津具半島、福岡・長崎の島々などである。

それらの海域は都市部から距離があり、都市汚水や工業排水の影響を受けにくい遠隔地で、海の環境は比較的良好さをまだ保っている。しかし、海女が漁獲の対象としているアワビ、サザエ、ウニそして海藻類の資源の減少は著しく、海女数の減少も止まらない。資源の減少より大きな海女の

減少の原因は、若い女性の都市への移動にある。昭和31年代には全国に17,611人の海女がいたのであるが(東邦大学)、現在、減少は著しい上に、さらに高齢化が進んでいる。若い海女のなり手がいないのだ。

海女の存在は、5000年ほど前、すでに素潜り潜水でアワビ、サザエを獲っていたことが、考古遺跡から大量のアワビ殻が出ることによって確認されている。古代には万葉集や枕草子など文学にも登場した。時代は下がって江戸期には浮世絵に盛んに描かれて庶民にも知られていた。その海女の長い歴史に、このまま推移すると終止符が打たれるかもしれない。

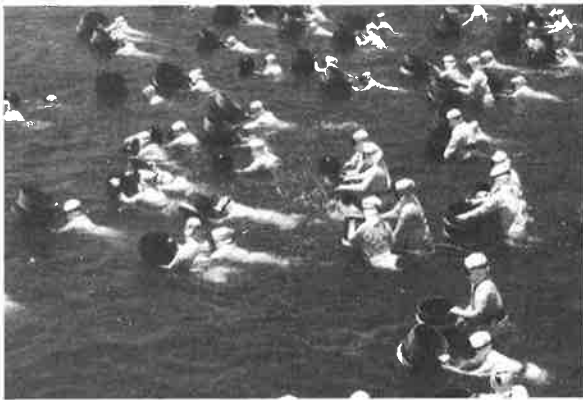
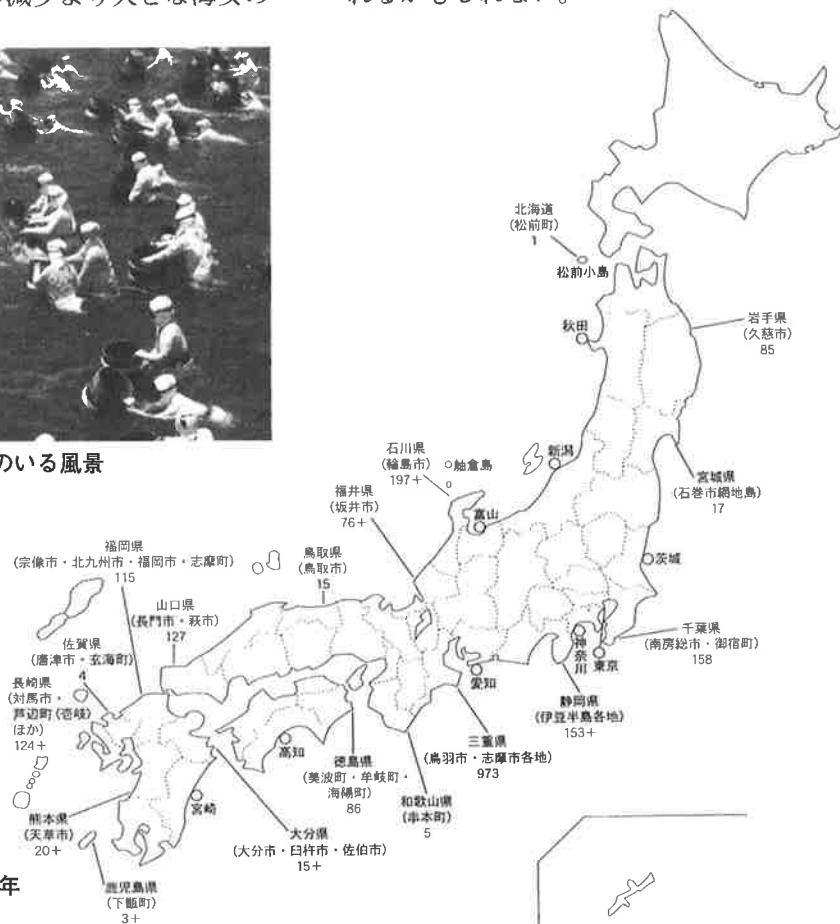


写真1 海女のいる風景



○印は昭和53(1978)年には海女のいた県

図1 海女分布日本地図

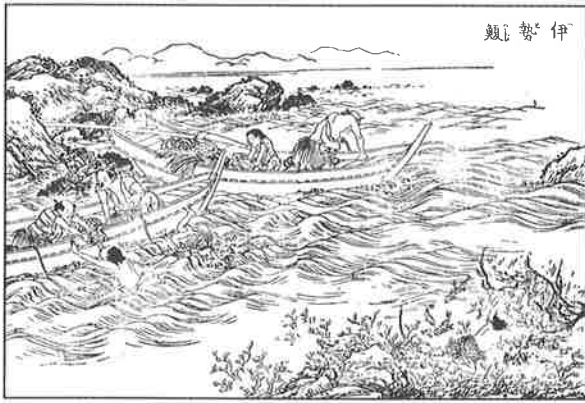


図2 「日本山海名産図会」

### 海女の減少をもたらした原因は

入手することが出来る最も古い統計によって知る全国海女の数は、昭和6年の12,426人である(千葉県社会課調査)。

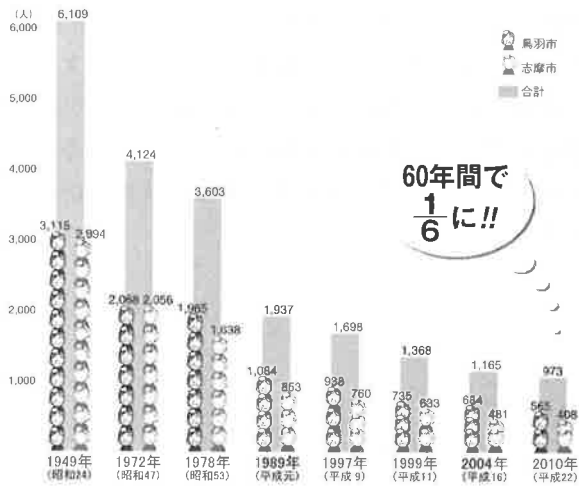


図3 三重県における海女数の推移表

それが一時18,000人近く迄増えたものの、昭和40年代後半をピークに直線的に減少して、2千人を維持するのも困難な状況に至っている。この減少は同じように減少をつづけ20万人を割ろうとしている男漁師よりも比率は大きい。

これまで海女の減少の原因と考えられてきたのには、(1)アワビ資源の減少、(2)海女漁の収入の不安定さ、(3)酷しく、危険があり、汚い3Kの仕事。主として、この3つが挙げられてきた。

確かに(1)アワビ資源の減少はほとんどの海女地区で云われ、現に三重県の漁業統計で見ると昭和40年の最高値752トンから10分の1以下に減少し、平均年約300トンからでも約5分の1に減っている。

(2)の海女漁の収入が不安定というのは、0Lと比較してのことで、なによりも月給のように収

入が定額でない。海女漁には最盛期と禁漁期があり、禁漁期の収入はゼロである。大漁もあれば、不漁もある。

(3)の仕事の酷しさ、危険、汚い、については確かに海中で呼吸をぎりぎりまで使いきってアワビやサザエを獲るのだから、陸上の人から見れば酷しいと思えるかもしれないが、海女から見れば目的のある稼ぎ仕事であり、慣れた楽しい労働だ。命綱が海底の岩などに絡まる危険は稀にあるが、慣れた海女には起こらない。さらに海女の潜水延べ時間は長くない。専門的な海女でも年間100日から稀に150日くらいの労働日だし、1日長くて労働時間は3時間である。海女の潜水は“50秒の勝負”と言われるように、1潜り1分以内だから、浮上して一息つく時間も入れれば1時間に40~50回程度の作業である。近年はウエットスーツを着るから寒さにも耐えられる。ワカメ、ヒジキ、アラメなど海藻類は採った後の天日乾燥の作業は相当酷しい。しかしその作業も数日で終わる。農作業の長さから見ればとりわけ酷しいとは言えない。汚い仕事と言うのは論外である。



写真2 潜水する海女



写真3 ヒジキを干す海女

しかし、この3つの要因は、若い女性が海女になることを阻んでいる原因ではある。

### 海女が漁村を去る理由

アワビ資源の減少による収入の減少だけが、若い新しい海女の就業を阻む第一の原因かと調べてみると、必ずしもそれだけではなさそうである。

現在、三重県の海女の平均年齢は60歳を越えてしまったと推定される。団塊の世代と言われる昭和22～24（1947～49）年生まれ以上が多く、以降海女はどんどん少なくなる。現在の65歳は昭和24（1949）年生まれだが、彼女たちの多くは中学校しか出ていない。卒業の年は昭和39（1964）年で、まだ高度経済成長期であった。都会はもちろん、そう遠くない都市に、働き口がいくらでもあったから、同級生の多くは海女にならず勤めにでた。親である海女たちは娘に、海女になるよりOLになれと進めたし、学校の教育も会社や工場で働くことを教えていた。海女である親たちは、自分は小学校しか出ていないから、海女をしているのだと考え、子どもらは高校までやって、良い会社に勤めさせてやりたいと考えていた。いつの間にか若い女性たちは、土を耕して働くことや海に潜って働くことを厭うようになっていった。

さらに女性は田舎を嫌って去って行く。漁村も田舎だから、漁村は今日の女性にとって住みやすい場所ではないと考えられているからだ。

さすがに「封建的」と言う言葉は聞かれなくなったが、現実には漁村の多くに古い慣習が残っている。とくに海女漁村には未だに古い慣習が変らずに残っていて、外からの若い女性を海女としてすんなり受け入れる気持ちが薄い。他地の女が来ると自分の磯が奪われると、考えて嫌がらせをするし、拒む。さらに老漁師の多くが輪をかけて因循姑息だ。未だに力を誇示する男の労働が優位だから、力の弱い女性の意志は反映されない。男のごり押しが通る。女性の存在を認めることの少ない男社会なのだ。

要するに、海女の暮らす漁村社会はものごとがどんどん変わってゆく時代に適応していない。古く長い伝

統のもとに続けられている海女漁だからこそ、古い慣習を引きずっているのは理解できるが、新しい時代に対応する制度ややり方も進んで採用する必要があるし、そうでなければ若い人は去ってゆくのは当然だ。

### なぜ、海女を世界遺産に登録するのか

2009年、鳥羽市と志摩市は海の博物館を会場に、全国から12県の海女さん約100人を集めて「第1回 日本列島“海女さん”大集合」を開催した。そして日本の海女文化をユネスコ世界文化遺産へ登録する運動をはじめるとを宣言した。

まさにその宣言の目的は、危機に瀕している「海女文化」を全国の海女が連携して継承保存し、振興しようという決意を表明した訴えであった。以降、2013年、石川県輪島市で開催した第4回海女サミットに引き継がれた、活動は活発化している。

さきに述べた如く、海女漁は漁業の世界では、幾つかの例外地区を除いて、重要だと考えられて来っていない。海女の数が全国2千人と、男漁師と比べて少ない（約1%）こともあるが、海女の漁獲物の水揚げ絶対量も少なく、水揚げ金額も多いとは言えない。しかし、海女漁には大きな資本はもちろん、操業の経費はほとんどかからない。ウエットスーツの損耗以外は船で沖へ出る場合のガソリン代くらいだ。あとは組合の手数料がいるだけ。水揚げ金額そのものが収入である。

男漁師のような大漁もなければ、極度の不漁もない。海のことだから、多少の漁不漁はあってもその幅は小さい。だからこそ海女は永く存続して



写真4 輪島に海女集合

きたのであるが、漁業の主役たりえては来なかった。

日本の周りには 36,000km の海岸線とそれに続く浅海域の多くは、都市汚水や工場排水によって汚染の影響を受け、素晴らしい自然環境を維持しているとは言い難いが、それでも漁業資源動植物の棲息できない死の海には至っていない。とくに冒頭で記した如く、海女のいる半島部や島嶼部はぎりぎり磯根資源を保持している。

中でも海女が活動する沿岸の水域には「海の森」である海中林や藻場が元気で優れた生態系があり、その海藻類に支えられてアワビ、サザエ、ウニ、イセエビ、タコなどの魚介類が生育している。この沿岸水域は、動植物プランクトンを食餌するイワシやサンマのように大魚群をつくることはないが、一定量の持続的な生産量を保持する、優れた海域である。



写真5 海藻の中の海女

その海域を大事に、過剰漁獲を許さない仕組みを維持しながら守り、操業している海女こそは誇るべき漁業者なのである。

日本の漁業はこれまで、海女の存在を真剣に考えたことがない。行政はもちろん大学など研究機関も、漁業組合でさえ、海女の価値を重要と捉えたことはないのだ。

### 海女が新しい沿岸漁業を担う

明治以降、日本は「極東の小さな島国」と自己を規定して、拡大することが良いことだという政策を一貫して取り続けてきた。漁業はまさにその先兵であった。明治の初めにはじまった遠洋漁業奨励策は、近年の挫折まで無理やり押し進められた。その後押し進められた漁業の工業化である大規模養殖業も、国の支援に支えられてなんとか存続しつづけているが漁業者の手を離れようとして

いる。漁業組合は相変わらず大量販売を方針とし大規模流通業に肩を並べていこうと競っている。

その間も僅かに全漁業者の1%に過ぎない海女たちは、ひそやかにしかし逞しく漁村を支え続けて来た。

海女の在り方は実に多様だ。年中専門的に海に出ている海女もいれば、夫婦で深い漁場で漁をする船人海女、浅い磯場で夏場だけトコブシや海藻をとる年取った海女もいる。夫といっしょに網漁をする海女もいれば、民宿を営みながらの海女もいる。畑仕事や旅館の仲居に出る海女もいて、じつと無為に一日を過ごさない。海女の業態は多様で複雑であるからこそ、強さがある。

### 多様なあり方の中に強さの海女

以前、畑作農家の人から聞いたことがある。畑に季節季節の野菜を植えて収穫するが、それは月給である。鶏を飼って卵をとっているが、これは日給である。田圃が少しあるのは、ボーナスであると。

総てが自然の海からの収穫物である海女漁と比べるとは無理があるだろうが、アワビ、サザエ、ウニ、ナマコはボーナスと考え、海藻類を月給とすれば、あとは日給を工夫すればいい。最近は観光客に昼食を出す「海女小屋」も人気がある。自分たちが採った海藻を袋詰めして小売販売も出来る。潜って獲る時間は短いのだから、簡単な加工をすれば日給くらいにはなる。以前は薪拾いに活用した森林も残っている。

いま日本には18の県に2,000人の海女がいる。男の海士ももっと多くの県に同数以上いるだろう。これ等の海女と海士が浅海域の新しい操業ルールを考え、持続的な資源管理をさらに進め、実行するならば、沿岸漁業再生のモデルとなるに違いない。海なる自然がある限り、それを多様に活用する可能性を海女は逞しく切り拓いてゆくだらう。



写真6 海女小屋で談笑する海女